

令和 元年 6 月 20 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04380

研究課題名(和文) ユマニチュードによる自閉症児の症状緩和効果に関する実験的研究

研究課題名(英文) The experimental study of effect of Humanitude on the symptoms of ASD

研究代表者

山口 創 (Yamaguchi, Hajime)

桜美林大学・心理・教育学系・教授

研究者番号：20288054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：3年間の補助事業期間のうち、1年目は実験の準備と倫理審査に費やした。2年目は自閉症児に対して医師と養育者によるユマニチュードに基づく長期的な介入効果を検討した結果、自閉症児の症状が緩和され、対人志向が高まる効果が確認された。3年目は施設職員による介入効果として、特にタッチングに焦点化して検討した結果、自閉症児のオキシトシンの分泌が促され、特に不安やストレスが原因とされる自閉症状が緩和される傾向が確認された。今後、自閉症児の対人関係(家庭と施設職員)すべてにおいてユマニチュードに基づく接し方を行うことで、症状の全般的な緩和が期待できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達障害に分類される自閉症スペクトラム障害(ASD)は、共感性の欠如や常同行動などさまざまな症状を呈する障害であり、それら症状は、特に脳内オキシトシンの分泌が抑制されていることが一因であると考えられている。ASDは特に対人関係に不安やストレスを感じやすいため、それらを与えない方法が有効だと考えられる。

ユマニチュードは、もともとは認知症高齢者へのコミュニケーション技法として確立されたものであるが、この方法をASDに応用することで、不安やストレスを与えずにコミュニケーションするのに役立つことがわかった。今後、ASDと接する際に「見つめる」「触れる」方法を活用できることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The first year of the three-year assistance program was spent on preparation of the experiment and ethics review. As a result of examining the long-term intervention effect based on the immunity by the doctor and the carer for the autistic children in the second year, the symptom of the autistic children was alleviated and the effect of increasing the interpersonal orientation was confirmed. As a result of focusing on touching as an intervention effect by the facility staff in the third year, the secretion of oxytocin in autistic children is promoted, and autism caused by anxiety and stress is apt to be alleviated. From now on, we can expect general alleviation of symptoms by giving treatment based on Humanitude in all interpersonal relationships (home and facility staff) of autistic children.

研究分野：健康心理学

キーワード：自閉症スペクトラム オキシトシン ユマニチュード

1. 研究開始当初の背景

ユマニチュードはフランスのイブ・ジネストとロゼット・マレスコッティにより開発された36年以上の歴史を持つ知覚・感情・言語による包括的なケア技法であり、日常のケアの一環として導入できる。フランスの病院では、ユマニチュードを導入した結果、向精神薬の使用量の減少や、職員の負担の減少等の効果も出ている(本田他,2014)。

ユマニチュードは認知症患者の行動・心理症状(BPSD)の軽減効果が立証された技法であるが、認知症患者に限定されたケアではなく、汎用性が高く対人援助の場においてすべての人に使える利点がある(本田他,2014)。

本研究では、ユマニチュードを自閉症スペクトラム障害(以下、ASD)に適用することの症状緩和効果について明らかにすることを目的とした。

ASDは発達障害の中でも周囲の理解が浅く、その障害像が多様であり、養育における困難度も高い。そのため、養育者とのアタッチメントの形成ができず、養育者のストレスが高いことがわかっている(永田・佐野,2013)。

2. 研究の目的

ユマニチュードは認知症高齢者のケアにおいて、行動・心理症状(BPSD)を劇的に軽減するケアの技法として確立され、国内外で非常に注目されている。本研究では第1に、ユマニチュードを自閉症スペクトラム障害児(以下、ASD児)へ適用することによる、症状の緩和効果について検証することを目的とした。

第2に、ユマニチュードの要素の中で、最も重要であると考えられる「触れること」、つまりタッチングについて焦点化し、その効果を明らかにした。

3. 研究の方法

平成28年度は、ASD児の養育者にアンケート調査を行い、日常生活で生じる困難な状況を抽出し、各々の状況に対してとるべきユマニチュードのケアを考案し、養育者への指導のためのパンフレットの作成を行った。

平成29年度は、そのパンフレットを用いて養育者にユマニチュードのケアの実践を指導し、養育者により3か月間のユマニチュードのケアを実践してもらい、その効果を測定した。具体的にはまず、世田谷区と目黒区の療育施設を対象に、研究参加者の募集を行い応募した4組が対象となった。応募した4組については、予め研究の説明を行い、倫理的配慮を行った上で同意をとった。

事前評価は9月中に東京医療センターで行い、母親を対象にユマニチュードの考え方や子どもとの具体的な接し方について教示した。またその際、保護者には質問紙調査を行い、子どもにはスタッフと遊んでいる場面の行動撮影を行った。

その後、家庭での子どもとの接し方について、うまくいかない点や困っている点について、家庭で親子のコミュニケーションの様子をビデオで撮影してもらった。撮影されたビデオについては、東京医療センターに持参してもらい、それをスタッフと観察しながら改善点について指導を行った。これを10月と11月に1回ずつ行った。相談はユマニチュードのインストラクターが各1時間程度行った。

12月には事後評価として、親子に東京医療センターに来院して頂き、質問紙調査と行動評価を行った。

平成 30 年度は、ユマニチュードの要素のうち「触れること」の効果について検討するため、ASD 児を対象にタッチングを行った。

4 . 研究成果

3 年間の補助事業期間のうち、1 年目は実験の準備に費やした。

2 年目は自閉症児に対して医師と養育者によるユマニチュードに基づく長期的な介入効果を検討した。実験の結果については、保護者の育児不安と、子どもの自閉症症状について質問紙調査の結果を事前・事後で比較を行った。その結果、育児不安の 3 因子（中核的育児不安・育児感情・育児時間）については、3 ヶ月の介入によって低下していた。一方、子どもの自閉症症状については、「対人関係・社会性の問題」、「コミュニケーションの問題」、「その他」については、概ね低下していたのに対して、「くせ・きまりについて」の症状については介入後に上昇していた。その理由について、ASD 児の脳内でオキシトシンの分泌が高まり社会性の向上をもたらしたと考えられる。「くせ・きまりについて」の症状が高まった点については、今後さらに検討すべき課題であろう。

3 年目は、医師による自閉症スペクトラムの診断がある自閉症スペクトラムの症状のある 3 歳～9 歳（平均年齢 5.75 ± 1.71 ）の子ども、計 8 名を対象として、3 週間の介入を行った。介入は、参加者と目を合わせ、距離を近づけて挨拶することや、触れることを主眼としたものであった。指標は、施術前後に参加者の唾液を採取しオキシトシンの含有量を測定した。また第 1 回目の施術前と最終回の施術後に質問紙調査（東京自閉行動尺度、対児感情尺度、母性意識尺度）を参加者の母親を対象に行った。実験の結果、介入初回の施術前後において、参加者のオキシトシン濃度は 3.20 から 8.00 に増加した。介入 3 週間後には、施術前の数値が、3.60 に増加していた。この結果より、本実験の介入により普段からのオキシトシンの分泌が促され、その結果不安が低減したことがわかる。さらに東京自閉行動尺度の「くせ・きまり得点」、「自閉症状の強さ」について、介入による効果が確認され、介入により不安症状が軽減した結果、症状が全般的に緩和されたと解釈できる。

今後、ASD 児を取り巻く対人関係（家庭と施設職員）すべてにおいて、同様のユマニチュードに基づく接し方をすることで、症状の全般的な緩和が期待できる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Hitomi,T.,Yachi,T.C.& Yamaguchi,H. An experiment on the psychological and physiological effects of skin moisturization on lower legs-In expectation of application to nursing practice at hospitals. 2018 Behavioral Science 8,91 (査読有)

Yachi,T.C., Hitomi,K.& Yamaguchi,H. Two experiments on the psychological and physiological effect of touching-effect of touching on the HPA axis related parts of the body on both healthy and traumatized experiment participants-. 2018 Behavioral Science,8, 95 (査読有)

人見太一・谷地ちぐさ・山口創 下腿部への保湿剤塗布の効果検証 リラクセーション効果に与える影響 2018 日本看護技術学会誌, 17, 90-94. (査読有)

Hitomi,T.,Yachi,T.C.& Yamaguchi,H. The stress reduction and relaxation effect of touching-wrapping a hand of an experiment participant by both hands of a practitioner. 2018 Intenational Archives of Nursing Health Care IANHC-107
(査読有)

〔学会発表〕(計3件)

山中佑記・坂本考司・齋藤菜穂子・中村 純二・山口創 日々の養育行動を介した触覚刺激に対する母親の心理変化 2018年 日本小児保健協会学術大会
人見太一・谷地ちぐさ・山口創 下腿部のタッチングによる皮膚の保湿効果について 2017年 第29回日本健康心理学会大会
石川翔吾・佐々木勇輝・山口創・林 紗美・盛 真知子・森谷 香子・本田美和子 マルチモーダルケア技法による自閉症児への介入効果検証に向けた基礎的検討 2017年 第14回子ども学会議

〔図書〕(計4件)

山口創 「2章ライフサイクルとメンタルヘルス(1)周産期、乳児期 幼児期」(p30-53)、
「3章ライフサイクルとメンタルヘルス(2)児童期・思春期・青年期」(p54-75)、「4章ライフサイクルとメンタルヘルス(3)成人期」(p76-98)、石丸昌彦(編著)『今日のメンタルヘルス』、2019年、放送大学出版
山口創 脳からストレスが消える「肌セラピー」、2018年4月、青春出版社、総頁数128
山口創 皮膚感覚から生まれる幸福、2018年1月、春秋社、総頁数216
山口創 皮膚は「心」を持っていた、2017年8月、青春出版社、総頁数192

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：本田美和子

ローマ字氏名：Honda Miwako

所属研究機関名：国立病院機構東京医療センター

部局名：内科

職名：医長

研究者番号（8桁）：40575263

(2)研究協力者

研究協力者氏名：石川翔吾

ローマ字氏名：Ishikawa Shogo

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。